

2026年5月3日放送・第551回グラウンドワーク三島・アクショントーク

災害初動支援・避難所運営・物資再配分と心のケア

ラジオ第551回 災害支援の教訓

災害支援の現場から学ぶ： グラウンドワーク三島のアクション哲学

東日本大震災の初動支援で見た、制度の壁を越える「現場主義」の本質

—
**「議論よりアクション」
現場にこそ、神は宿る。**
理屈や議論で止まるのではなく、まず現場へ赴き、目の前の課題に対して
一つずつ行動（足し算）を積み重ねること。

🔗 行政の壁を越える「機転」

制度の矛盾

支援物資は受領した瞬間に「行政財産」となり、他自治体への提供が法律上の「寄付行為」として制限される。

現場の突破口

「一度捨ててから、拾う」
廃棄物とすることで行政財産から除外し、本当に必要としている避難所へ物資を届ける。

コーディネートの力
異なる能力を繋ぎ、成果を最大化する

X² Multiplication

個人の力は「足し算」だが、有機的に繋がることで力は「掛け算」や「二乗」へと進化する。

♡ 尊厳を守る「共に作る」支援

- ☑ 調理を通じたコミュニティ再生
完成品を配るのではなく、高校生とお年寄りが共に豚汁を作ることで生きる意欲を引き出す。
- ☑ 細やかなニーズの調整
「入れ歯の方にはリンゴを刻む」といった、現場の状況に合わせた確かな配慮を徹底。

👤 現場を支えるプロフェッショナル

- J** ジャンボさん（渡辺 豊弘）
コーディネーター。舞台作り（環境整備）と卓越した運転技術で現場を牽引。
- M** メンボーくん（河合さん）
精神保健福祉士。高い実行力と専門性で被災者の心に寄り添う支援を展開。

📧 番組へのアクション

📧 メール 📠 ファックス

番組へのご意見・ご要望をお寄せください。皆さんの声が次のアクションに繋がります。

NPO 法人グラウンドワーク三島の渡辺豊博（ジャンボさん）と三島市福祉応援大使の河合メンバーさんを、ゲストに迎えた本ラジオ番組では、東日本大震災での支援活動を詳細に振り返りました。

行政の壁により、支援物資が届かない問題を「一度捨ててから拾う」という機転で乗り越えた具体例や、被災者の尊厳を守るために「共に作る」支援の重要性を語り、議論よりも行動を重んじる「アクション」の哲学が強調されました。

ゲスト「河合メンバーさん」の登場

第 551 回を迎えたラジオ番組「グランドワーク三島・アクショントーク」は、NPO 法人グラウンドワーク三島の渡辺豊博（通称ジャンボさん）と岡本真由美さんによって進行されました。

リニューアル・再開後 3 回目となる今回の放送では、三島市福祉応援大使の「河合メンバーさん」がゲストとして登場。

ジャンボさんは、自身の誕生日が 5 月 28 日であることに触れつつ、メンバーさんを「食欲が固まって、福祉大使になった有名人」「胃が 5 つくらいある」とユーモアを交えて紹介し、二人の親しい関係性をうかがわせました。

メンバーさんは、ジャンボさんとの長年の付き合いの中から生まれたニックネームの由来にも触れ、和やかな雰囲気番組がスタートしました。

東日本大震災支援：行政の壁と「現場主義」による突破

東日本大震災発生からわずか 1 週間後、放射能のリスクもまだ不透明な中、ジャンボさんとメンバーさんは、「決死隊」として現地入りした初動支援の様子を語りました。

当時、県庁から「マルキン」と呼ばれる緊急車両マークを得て、他の車両が、ほとんどいない東北道を走行した経験は、異様な緊張感に包まれていたといいます。

現地で直面したのは、行政の硬直的な法律と制度の壁でした。ある自治体に届いた支援物資は「行政財産」となり、たとえ隣町が物資不足で飢えていても、法律上の「寄付行為」にあたるために、他の自治体に移動させることができないという問題がありました。

物資が有り余って廃棄される町と、食料が枯渇している町。この矛盾に対し、ジャンボさんたちは、機転を利かせます。役所の担当者に「一度捨てた物資は行政財産ではなくなる」というルールを確認し、公式にゴミ捨て場で廃棄されたパンやおにぎりを「拾う」形で回収し、本当に必要としている、伊達市などの避難所へ届けました。

この行動により、被災地で初めて、パンが届けられたことになり、涙ながらに喜ばれ、制度の歪みと現場主義の重要性を浮き彫りにしました。この活動を支えたのは、SNS が普及する以前の当時、青年会議所のネットワークを駆使して、ジャンボさんの元に集まったリアルタイムの現場情報でした。

支援の質を高めるコーディネート「共に作る」重要性

支援活動は、単に物資を届けるだけではなく、その「質」が重要であるとジャンボさんは強調します。特に、被災者の尊厳を守り、生きる意欲を引き出すための工夫について語られました。

当初は、完成品の食事を配る形でしたが、「人間の尊厳上問題だ」と感じ、途中から、食材を持ち込んで被災者と「共に調理する」スタイルへ転換。高校生たちとお年寄りが一緒に豚汁を作る活動は、世代間の交流を生み、コミュニティの絆を再生させるきっかけとなりました。

また、支援のミスマッチも指摘されました。ある避難所では、毎日、カツカレーばかり、別の場所では、おむすびばかりという食料の偏りが発生。ジャンボさんは、各避難所のリーダーを集め、食事をローテーションさせる仕組みを提案し、食生活の改善を図りました。

さらに、入れ歯の高齢者が多いにも関わらず、リンゴが丸ごと配られている状況を見て、細かく裁断するように指示するなど、現場のニーズを的確に把握して調整する「コーディネーター」の役割が、いかに重要であるかを具体的なエピソードを通して示しました。

こうした活動には、精神保健福祉士の国家資格を持つメンバーさんの、人の心に寄り添う専門性も大きく貢献したといます。

「議論よりアクション」グラウンドワーク三島活動哲学

一連の支援活動の根底には、グラウンドワーク三島の「議論よりアクション」「現場に真理あり」という哲学があります。課題を抱える現場に自ら赴き、一つずつでも行動を積み重ねること（足し算）の重要性を説きました。

さらに、異なる能力を持つ人々や組織を有機的に繋げることで、その力は単なる足し算ではなく「掛け算」、時には「二乗」にまでなると語ります。

メンバーさんのような実行力のある人物に対し、グラウンドワーク三島は、照明や大道具を用意する「舞台作り」の役割、すなわち「コーディネーター」としての役割を担っていると説明しました。

社会が抱える問題や個人の苦しみがあるからこそ、それを解決しようとする自分たちの存在意義が生まれるとし、大きな視点で社会を見ることの重要性を締めくくりに述べました。

番組の終盤では、竹内まりやの「駅」をBGMに、より個人的な話題で盛り上がりました。ジャンボさんが、かつて日本山岳ラリーで2度のチャンピオンに輝いたほどの卓越した運転技術の持ち主であることや、その腕前で雪の凍結路を時速60~70kmで走行できるエピソードが披露されました。

一方、メンバーさんは過去にダウン症のドラマーらとバンドを組み、1000人規模のライブを成功させた経験があることや、長距離運転を担う中でジャンボさんの奥さんから厚い信頼を得ていることなどが和やかに語られました。

最後に、番組への意見や要望をメール・ファックスで募集する案内があり、来週の放送へと繋がられました。